

1998年 秋 季 大 会 報 告

11月21日(土)・11月22日(日) 北九州市立女性センター“ムーブ”
北九州市小倉北区大手町11-4

第1日目：11月21日(土) 13:30～17:00

シンポジウム 専業主婦という「選択」—その是非または幸、不幸—

3人のパネラーを迎えて、専業主婦に焦点を当てたシンポジウムである。

山田昌弘氏(東京学芸大学)は、「専業主婦の夢と現実」と題して、新しい専業主婦志向について紹介した。そして父親の収入と母親の家事労働を享受している女性が「乗り換え」相手の配偶者を求めるが、そういう男性が多いわけではなく、結婚することを選ばずに親と同居を続ける。このような未婚者を、山田氏はパラサイトシングルと呼び、これが未婚化少子化の原因となっているとした。そして、こういう背景にあって、「女性の利益という衣を被った公益のイデオロギー」であるフェミニズムに困難があることを指摘した。

遠藤みち氏(税理士)は、「考えてみよう 配偶者控除・配偶者特別控除」と題して同税制の成立のいきさつ、仕組み、そして103万円の壁と言われているものを解説し、その問題点を指摘した。結果的に主婦優遇策が女性の経済的自立を阻む障害にもなっており、高齢社会に向かつて、女性が自立するためにはそれを見直し、女性が被扶養者から脱却することが必要であるとした。

浅野千恵氏(東京都立大学大学院)は、「『セックスワーク』を通して考える女性の社会的立場」と題して、女性同士を分断する社会の仕組みに言及した。氏が指摘したの

は「表の労働市場」「裏の労働市場」「専業主婦」という女性の分断である。そして女性の労働構造全体を捉えるには「裏の労働市場」;すなわち買売春を単に人権侵害としてでなく「労働」と見ることが必要だとした。そうでないと、売春と暴力の微妙な違いが見えなくなり、とりわけ自由意志からの売春とみなされる場合は、暴力さえも労働の一部と見なされてしまう点を指摘した。

多様な観点からのアプローチが展開されたという点では、面白いシンポジウムであったと思われる。その中で、例えば、山田氏が提起した、「女性の利益という衣を被った公益のイデオロギー」であるフェミニズムの困難や、遠藤氏の問題提起を受けて具体的などう税制を構想するかの問題、また、浅野氏が提起する売春をセックスワークと捉えることの必要性、またそうすることによって把握される問題に関する議論など、深めなければならない論点がいくつも出された。しかし、時間的制約があった事も確かであるが、フロアーとの質疑では、買売春を労働の観点から見ることに関しての「主婦」の心情的違和感の表明で会が終わるなど、かならずしもこれら論点に参加者に共有されたとは言えず、従ってそれらが深められることなく終わった事は残念であった。

報告：広瀬 裕子

第2日目：11月22日(日) 10:00～12:00

個人研究発表報告

◇アメリカにおける中国女性研究の動向

—日本・中国における研究との比較から—

くずめ よ し

70年代、中国女性は「解放のモデル」と評されていた、というよりも「そう信じたかった」のだ。本発表は、第二派フェミニズムを、アメリカの中国女性研究の動向をたどる中でこう総括する。

女性解放の「理想」とされた中国では、この30年、「婦女

回家」論争や「主婦」「娼婦」の出現と、かつての「解放モデル」を基準にすれば後退したような現象が生じている。

しかし、その中国の実際を見ることのできるようになった80年代以降のアメリカの中国女性研究は、衰退するどころかむしろテーマや対象とする時代の広がり、研究者の重層化が進んだ。そして古い伝統や因習について、分析する客体を「遅れてる—進んでる」という基準で見ている自らの視点そのものを内省していく。その背景

には、「分析する主体」であるアメリカで、女性学が「学」として確固とした市民権を得たことや、イデオロギーの終焉と言われる90年代、オリエンタリズムへの反省から歴史の見直しが始まった事などがある。

そこで、こうしたアメリカの動向をさらに「客体」として分析する「くずめよし(分析する主体・その2)」は、分析する「主体-客体」の政治力学のなかで「自分がどこから発言しているのか」を問うことを、実証研究の方法として提示する。その提言にうなづけるものはあるが、むしろそれが「分析のための分析」に陥る危険性はないのかが、現在切実な問題なのではないか、という疑問が残った。(正田 京子)

◇「新しい女」の都市サブカルチャー

—ヴァイマル時代女性史—

石井香江

石井香江さんによる、ドイツ女性史研究の新しい研究成果に依拠した真摯な発表であった。1920年代ヴァイマル時代の女性の性モラルと自己認識の変容に関して、ベルリンに出現したホワイトカラー層の20代の女性たちの風俗の流行現象を、サブカルチャーという概念によって把握し、解釈しようという内容である。この女性たちは「新しい女」と呼ばれたが、ベルリンに興隆した「女性のバー」を彼女たちのネットワークの結節点ととらえ、彼女たちに愛読された女性同性愛者向けの雑誌『フロインディン』や『ギャルソヌス』に注目して、非政治的で享乐的と見られがちなサブカルチャーに、支配文化を内側から浸食する抵抗運動としての可能性を読みとろうとした。当時のベルリンの若い働く女性たちが、既存の女性解放運動には包含されえず、女性としての連帯の新しい求心力を、男性社会に背を向ける、あるいは男装等の積極的男性化スタイルの採用という固有のアイデンティティ確認手段の共有に見いだしていた、という把握は興味深い。現代の分離主義的レズビアン・コミュニティのことなども連想しながら発表を聞いた。さらにこのテーマで研究を進展されることを期待したい。(掛川 典子)

◇レズビアンは、なぜマイノリティなのか？

—性経済学からのアプローチ—

小出 寧

レズビアンがマイノリティであるという理由を、アダムスの衡平理論を用いて考察された。セックスは、経済的問題と無関係ではあり得ず、異性のカップルだけでなく、同性のカップルにも適用できる経済的法則性を見出す試みがなされた。分析の枠組みとして、アダムスの衡平理論(最もバランスのとれた二者関係を表す式がある)を用いて、一回のセックスで女性(役)が得る報酬(満足度)を数式により算出する。それが導かれる過程として調査が行われた。方法は、専門学校の女子学生を対象に、セックスに関わる変数として、性別と年齢、セクシュア

リティについては、異性愛者と限定し、セックスの満足度についての心理テストが行われた。二人の関係でのアンバランスをあらわす不均衡値を算出し、それを男女のセックスにあてはめる。その結果、セックスの満足度は、男女のカップル二人の年齢に規定されているという分析結果がでた。次に異性愛の女性の、男役、女役でのセックスの満足度は、男役が「欲望」からではなく、「奉仕」としてセックスするため、女役の方が満足度が高くなるという。交互に役割を交換すれば、バランスのとれた関係が築ける、つまり男なしのセックスの可能性を指摘。そこでレズビアンがマイナーなのは、男役が奉仕すること、報酬という観点からすると男とセックスする方がメリットが大きいという結論が出る。

レズビアンの定義として、男役、女役から成るという前提に問題点が残る。また、調査の対象が20才前後の異性愛の女性であり、異性愛者に対し、もしレズビアンであったらという設定に無理があり、彼女たちから見える想像の世界にすぎない。実証しないかぎり、普遍的であるとは言えず、社会通念と実態とは別であると言わざるを得ない。前提そのものから問いをおさなければならぬのではないだろうか。(河井 紀子)

◇男性至上主義的セクシュアリティと

買春・ポルノグラフィ

杉田 聡

まずこのタイトルでの研究が、「男性」によって発表されることに驚いた。私は性問題に関して男性と面と向かって話したことがなかったからだ。しかし、この研究発表は常日頃、疑問、または不満に思っていることが見事に文章化されていた。

杉田氏は、最近のフェミニストの中での、ポルノ、売買春容認傾向を批判された。「ポルノグラフィ(以下PG)の性暴力を減少させる効果」という容認側の意見だが、近年の暴力的PGの増加と強姦認知件数は無変化で、強制猥褻はむしろ増加傾向にある、という数的事実。「PGによるセックス豊富化」論は逆にセックス平板化を招いていること。そして「買春が社会的抑圧から男を解放する」や「買春者=社会的弱者」という理由が買春を合法化することがあってはならないこと。そしてたとえ「弱者」だったとしても、彼らを受容するのではなくむしろ弱者を創らないような社会を目指すべきだ、という考えに加えて、買春者に対する厳しい罰則付与は大いに結構であるとの率直な意見に、私は思わず首を縦に振り納得した。

性問題に関しては世間一般では話し合いにくいものであるが、社会に対して沈黙することなく、活発に論議する。そしてその論議には男女を入り混ぜておくことが重要だということを実感した。(渡邊 慶子)

◇女性と日本の経済小説

田中由布子

電車が止まってどっと吐き出されるサラリーマンの群、横断歩道を渡る背広姿の固まり。いずれもテレビでおなじみのサラリーマン像だが、彼らがよく手にしている日経、競馬紙、週刊誌の他にどんなものを読んでいるのだろうか、とよく疑問に思ったものだ。しかし、長じて彼らの生態が分かるにつけ、その忙しさ、時間のなさ、体力の消耗度、現実の厳しさ等を考慮にいれると深淵な純文学作品など読む気が起こらないというのもよく分かる。いわゆるサラリーマン向けの読み物の一つに発表のあった経済小説がはいると思うが、まず感心したのは、着眼点の良さであった。経済小説というジャンルでくられる程の量があり、人数からいうと純文学よりよく読まれていると思うが、純文学プロパーの人たちが手をつけない分野であり、まとまった研究も少ないと思う。その意味で、田中由布子氏の研究は経済小説に関するあらゆる問題点を取り上げてあり、これからの研究の先鞭をつけるものと思われる。

この会に限らないが、もし研究発表を論文にして出版されるつもりの方は、前もってリクエストすればコピーをもらえるようにしてもらえないだろうか。発表がその場で渡された論文の棒読みというケースが多かったが、発表者には論文の要点を言ってもらい、もっと議論がしたかった。(T.M.)

◇女性起業家とライフコース

—ジェンダー意識に関するケース・スタディより—
福岡県女性総合センター研究員 小川洋子

女性の起業が、近年急速にもはやされるようになってきている。そこで、本研究では、女性の起業の現代的状況をジェンダーに関わる指標を用いて分析することを企図している。女性起業家に見られるジェンダー役割意識の上での特徴を起業家個人の側から整理するために、女性起業家を、起業のタイミングに基づくライフコース類型（「職業継続型」「職業ブランク型」）、業種（「タイプ1（従来男性向き分野）」「タイプ2（従来女性向き分野）」）、ジェンダー的志向性（a：ジェンダー役割意識「平等志向」「分離志向」 b：経済的自立志向「自立志向」「非自立志向」）に着目しつつ仮説的に類型・分析することを試みている。（調査データは、福岡県における「女性企業のニーズと支援に関する調査(1997～98年)」による。）

以上、分析指標に基づいて今回の調査対象者を類別・分析した結果、見えてきた特徴は、女性起業家たちはジェンダー役割規範に心の内では疑問や反発を感じていようと、現在ジェンダー規範のもとに置かれているということであった。また、「分離志向」における“女らしい感性”という言葉に代表される“ジェンダー意識の戦略的活用”や「平等志向」における、“男性化した女性起業家と見る解釈”という問題も指摘されていた。さらに、今後もより丁寧な調査を継続

し、起業の可能性を検討していくとのことである。

参加者からは、女性起業家は男性の経済的脅威にならない間は受け入れられるが、それを超えるとつぶされる運命にあるという意見や、女性の起業は雇用されない女性の単なる受け皿、安易な道にすぎないのではないかとの意見も出された。(西岡 敦子)

◇農家の家族経営協定のジェンダー分析

篠崎正美

1960年代からの日本の農家経営の変容過程での女性の地位の変化を概観した上で、平成6年度から「新・家族経営協定」事業として「後継者および女性」の家族と経営内の地位と役割の明確化をはかり、家族経営体の近代化と強化のために農水省が導入した協定は、女性問題意識を持つ女性農業改良普及員や専門技術員の努力で単なる「後継者政策」の枠を超えて、「農山漁村女性プラン」等を背景に女性解放、農業者としての自立・アイデンティティ確立の可能性を持つものとなっていることが、九州地域調査の事例から明らかにされた。(石塚 道子)

◇ベトナム縫製工場の女性移住労働者

織田由紀子

市場化経済への移行という経済変動のジェンダー別影響を明らかにする目的で1997年に行なわれたベトナム女性縫製労働者の実態調査から、農村から移住した若年女性層が多数を占める、都市居住女性よりは家計分担度が低い、国営工場が必ずしも労働条件が良いとは言えない、労働のインフォーマル化防止政策がないことが報告され、アジア的家父長制を利用した「器用で従順で再生産コストの低い若年女性労働力」がベトナムにおいても資本蓄積に重要な役割を果たしていることが実証された。

(石塚 道子)

1998年11月秋期大会無事終了

98年11月21、22日の両日、九州の小倉に近い「北九州市立女性センター”ムーブ”」において日本女性学会秋期大会が開催され、多くの参加者を得て、盛会の内に無事終了しました。地域の新聞などにも取り上げられ、専業主婦の是非についていくつかの切り口からシンポジウムで論じたことで、何らかのインパクトはあったようです。

今回の学会大会開催にあたり、北九州市立女性センターによる細大もろさない準備、当日の仕事遂行をいただき心より感謝いたします。また、当日ボランティアとしてご活躍いただきました皆様にお礼申し上げます。学会としては初めて海外から報告者を招聘でき、日本ではあまり知られていないモンゴルの女性の現状についてエンフトや国会議員に情報提供して頂きました。これもムーブからの助成金によって招聘が可能となったものです。ここに重ねてお礼を申し上げます。(國信)

ワークショップ報告

第2日目：11月22日(日) 10:00～12:00

◇キャンパス・セクシュアル・ハラスメント

—ネットワークを通じた対策づくり

コーディネーター 九州ブロック担当

窪田由紀、堤 要、蒲原くみ恵

約30名の参加者があり、第一報告者である詫間電波高専の副田由理子氏からは、京都大学の矢野事件を発端とした大学におけるセクシュアル・ハラスメント問題への各地での取り組み状況や「全国ネットワーク」発足の経緯、これまでの活動と今後の活動方針についての詳細な説明がなされた。

次に西日本新聞社会部の傍示文昭氏より、「女子大生2000人アンケート」の分析結果や地元大学での事件の取材を通して明らかとなった、被害者が「声をあげられない」メカニズムが指摘された。また、これまでマスメディアが性暴力や性犯罪をきちんと報道してこなかったこと、社会部には女性記者が1名しかおらず男性がキャップ、という現状への反省などにも言及がなされた。

第三報告として、九州国際大学の窪田由紀氏は、教員の持つ力を「社会的勢力」の概念を用いて「報酬勢力」「強制勢力」「正当勢力」「専門勢力」「関係勢力」の5つに分類して分析を加え、教員—学生間に内在する「力関係」を鮮明に浮き彫りにした。したがって、たとえ教員側が「そんなつもりはなかった」としても強制力を行使している場合もあり、教員の研修や学内倫理規定の整備などが必要であることを提言した。

最後に熊本大学の佐々木陽子氏は、予防、対応、説明の三つの責任をきちんと果たしてこそ、大学側は被害者に「勇気を出して」と言えるのであって、そのことを明記したガイドラインづくりが責任遂行の第一歩であると指摘し、「今は被害者ではなく大学に関わるすべての者が、この被害の防止に向けて勇気を出さねばならない」と訴えた。充実したパネリストの提起を受け会場からも、高額な裁判費用を援助するような基金の設立や、啓発用のビデオの作成など、具体的な問題解決や防止にむけての意見が出された。また、ワークショップの様子は地元新聞にカラー写真入りで報道された。(堤 かなめ)

◇専業主婦という「選択」

コーディネーター 浅野千恵

前日のシンポジウムに続いて行われたワークショップは、参加者全員の自己紹介から始まった。専業主婦であるかどうか、前日のシンポジウムの感想、このワークショップに参加した理由、自分の経験からの意見など、さまざまな話で1時間以上があっという間に過ぎた。その後、コーディネーターの浅野さんが、話の内容をだいたい3つにまとめ、グループに分かれて議論を進めるこ

とになった。

第1グループは女性のアイデンティティの問題を中心に議論し、社会的に作られた良妻賢母のイメージから今もなお逃れられないことが問題であるという意見が出た。また、仕事を持って働いていても主婦でもある、シングルマザーを主婦と呼ぶのかなど、何を主婦とするのかさえはっきりしていないことが浮き彫りになった。

第2グループは親子の世代の関係を中心に話し合った。「母と娘の結びつきが年々強くなっているが、それは実際には長期にわたって続くはずのない狭い結びつきである。視野の狭い幸せであることに気づき、もっと広い、そして一方的ではなく相互に関わり合える人間関係を作り出す必要がある」という意見が出され、この意見に対して賛成の声が多かった。

第3のグループはセクシュアリティの問題を中心に話し合った。セックスという一番正直に自分が表せる領域でまだまだ男が女を支配する文化が根強く、経済的基盤のない主婦が夫の強要を拒否しにくいという指摘が多かった。この1対1の関係にルールを作ることこそコミュニケーションで、それをお互いにオープンにする必要がある。性欲をあおるメディアやセックスワーカーへのさげすみはともに固定化されたイメージのまま、男女の役割分担と性差別を再生産し続けている。心地よい関係性を大切にしていきたい。以上、短時間でもあり、結論の出るものではないが、参加者それぞれが積極的に参加し、お互いの経験を共有し合うことのできたワークショップであった。

(小松加代子)

第2日目：11月22日(日) 13:00～15:00

◇「第三回東アジア女性フォーラム」報告会と

モンゴル会議

モンゴルLEOS会長 エンフトヤ 他

コーディネーター 國信潤子

「第三回東アジア女性フォーラム」の報告会の最初に、モンゴルの国会議員でありまた東アジア女性フォーラムの主催団体でもあるLEOS(レオス:リベラル女性能力集団)の会長、オードブ・エンフトヤさんが、モンゴル会議開催にあたっての苦労や会議後の変化を紹介した。会議開催に中心になって働いたLEOSは、女性問題を解決し、女性運動を強化する目的で結成されたモンゴル初の女性NGOであり、今回の会議はLEOSが全国の女性団体と協力、準備した。

会議開催にあたり、最も困難なことは資金調達であった。モンゴル国内は1990年以来、深刻な経済危機に見舞われていた。国民から資金協力を得るため、LEOSは1年

間全国を回り、広報活動を行った。幸運にもモンゴル訪問予定だった米国防務長官、オルブライト氏にLEOSとの会見を申し入れ、実現した結果、会議開催の重要性とLEOSの活動がマスメディアに大きく取り上げられ、アメリカおよびモンゴル政府から資金援助と支援を得ることができた。

会議に参加したモンゴル女性の3分の2は地方から来ており、今回が初の国際会議への参加で、異なった文化の女性たちと直接交流できたことは貴重な経験であった。今回の来日にあたっては、仲間から「モンゴル会議のフォローアップとしてモンゴル女性と日本女性との交流

を今後も継続し、協力したい」という思いを伝えてくるように頼まれた。また、「モンゴルには女性学そのものが存在していないので、ぜひ講座開設に協力してほしい」とも会場に呼びかけた。

続いて行われた北九州市女性センターの三隅佳子さんによるスライド80枚を用いたモンゴル会議全体の様子の報告と、武庫川女子大学の小松満貴子さんによるNGO訪問（「社会的進歩のための女性運動センター」と「モンゴル女性実業家協会」）についての報告により、東アジア女性フォーラムの盛り上がり様子とモンゴル女性NGOの活況をうかがうことができた。（森本 由美）

日本女性学会から

■学会誌編集委員会からのお知らせ

学会誌『女性学』を売ってください

昨年11月に『女性学』Vol. 6が出ました。今年度の会費を納入した方にはすでお手元に届いているはずですが、身近な方に是非もう一冊お薦め下さい。学会誌の刊行は、会費から捻出されている刊行補助費と学会誌の売上によってまかなわれています。今後も学会誌を毎年刊行していくためには、一冊でも多く販売する必要があります。1号から4号は2,000円、5号6号は2,500円ですが、会員は一割引です。

■日本女性学会学会誌『女性学』

7号編集委員からのお知らせ

学会誌7号の編集委員会が発足しました。編集委員は、中島美幸、長沖暁子、深澤純子、三浦裕（50音順）の4人です。同委員会では、学会誌『女性学』Vol.7を1999年11月に発行する予定で、目下編集作業を進めています。

■会計係から会費納入のお願い！！

今年度会費未納の方、納入お願いします。

未納の方には封筒に「未納」のスタンプが押してあります。ご確認下さい。

会費が納入され次第、学会誌をお送りします。



学会ニュース76号の1998年秋季大会、シンポジウムのパネリスト山田昌弘さんの所属名が間違っていました。正しくは東京学芸大学です。おわびして訂正いたします。

■日本女性学会 研究会のお知らせ

テーマ：「ヘテロセクシズムと女性の状況」

発表者：服部亜矢子さん

（『東海レズビアンニュースレター』もと連絡係）

日時：3月14日(日)1時30分～3時30分

場所：大阪女子大学女性学研究センター、セミナー室
性差別を問題にすることはあっても、そこに含まれる異性愛至上主義イデオロギーは問われないままであることが多い。それは女性の状況のなにかを説明しているはずだが、それは何なのか。「セクシズム」を、「ヘテロセクシズム」として認識し、さらにそれらを解体・変革していくには、どのような作業が必要なのか。今回は、運動と生活のなかでのヘテロセクシズムとの格闘を踏まえて、服部亜矢子さんに発表していただきます。

この研究会は日本女性学会が主催するもので、研究会担当幹事である萩原弘子が関西での研究会開催に関わる事務を行っております。学会員でない方のご参加も大歓迎です。事前のお申し込みは不要です。当日会場にお越し下さい。

研究会についてのお問い合わせは下記宛まで、お葉書かファックスでお願いいたします。

■研究会報告

「摂食障害を通してジェンダーを考える」

1998年12月5日、早稲田大学法商研究棟にて研究会「摂食障害を通してジェンダーを考える」が開催された。2人のパネラーが発表後、質疑応答。参加者約15名。

まず浅野千恵さん（東京都立大学院生）による「女性の自己表現について考える—摂食障害を手がかりにして—」。美やダイエット、摂食障害を女性の身体に対する「暴力」としてとらえ、自分の感情を肯定する教育を受けていない女性は自尊心が低く、間接的な自己表現として身体や食をコントロールし擬似的満足感を得ていること、医者「女は性的存在である」という意味づけ自体（ジェンダー）が摂食障害を形作るという見方、女が痩せようとする社会背

景として、女性の社会進出に伴うフェミニンで小さな服が急増するなどのバックラッシュと、女性のコンプレックスを生産・商品化する美容産業の存在が指摘された。

次に諸橋泰樹さん(尚美学園短期大学助教授)による「メディア分析から見えてくる身体規範」。女性雑誌の7割が広告記事であり、内容は美容・ファッションが(男は文化面)中心で白人系モデル・欧米資本が3~4割を占めていること、女子高校生の理想の体重は実際の1/3(男子は同じ)でこれは男子の女子に対する理想体重と近い事、また普通体重の女子中学生の4割が太っていると自覚していることなどから、男性主観の社会の中で広告が太っている人を「発見」し、欧米と男性資本を肥やしていることが指摘された。

ともに女性の個人問題として捉えられがちな摂食障害を生む社会のシステムが明らかとなった。少人数ではあったが、その分活発な討論が行われた。(佐藤 信子)

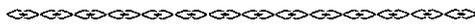
●会員の最近の著作

新・フェミニズム批評の会編

『「青鞥」を読む』

(學藝書林 本体3,143円)

女性のみによる雑誌『青鞥』は、終刊までの5年間に52号刊行された。そこには、驚くほど多くの女性たちが表現を残しているが、これまでの研究では、ほんの一握りの作家の、それも評論に焦点があてられる傾向が強く、文芸誌として出発した『青鞥』の全体像を俯瞰するにはいたっていない。この度、『青鞥』の文学的価値を明らかにすべく、私も含め、日本女性学会会員の幾人かが参加している新・フェミニズム批評の会から、昨年末、『「青鞥」を読む』を上梓した。23人の執筆者による本書は、『青鞥』の文学、『青鞥』のセクシュアリティ、メディアとしての『青鞥』の3部からなり、幅広い視点で『青鞥』を捉えている。是非、ご一読を。(中島美幸)



情報コーナー

※国際会議「女たちが公を変える」

1999年4月23日から25日までカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校にて。

主担当 シャーリー・リム

主報告者 リツ・メノン(インド、カーリー・フォ・ウィメン)、フローレンス・ハウ(フェミニスト・プレス)、コンスタンス・ペンリー(カメラ・オブスキュア)など。参加費50ドル。

※第7回国際学際女性会議「女の世界99」

1999年6月20日から26日まで。3年毎に開かれる女性学の国際会議。ノルウエーのトゥロムソ大学で。(University of Tromsø, N-9037 Tromsø, Norway)

※大学におけるセクシュアル・ハラスメントへの取り組みに関する情報

ブックレット・本・ニュースレターその他

キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク事務局、渡辺(電話ファックス075-771-5105、メール同上)

※第三回東アジア女性フォーラム報告書

於：モンゴル・ウランバートル1998年8月23日~26日
報告書(日本語版)ができました

体裁：A4版・224ページ

内容：第I部 フォーラム報告(翻訳)

【カントリー・地域報告】

中国・香港・台湾・日本・韓国・モンゴルカントリーレポート

【ワークショップ】

ワークショップ I：グローバル化と女性の労働と生活

ワークショップ II：女性の権利は人権である

ワークショップ III：政治と女性へのエンパワーメント

フォーラム宣誓文

2000年に向けての行動計画

第II部 フォーラムを終えて

頒価：3000円/1冊

購入ご希望の方は、お名前、送付先ご住所を記入して下記までお申し込み下さい。

1999年 春季大会予告

開催日時 6月26日(土)、27日(日)

会場 城西国際大学(千葉県東金市求名1)

シンポジウム：6月26日(土)

「20世紀の女性表現を考える」(仮題)

シンポジスト

水田 宗子

萩原 弘子

阿木津 英

小林富久子

コーディネイター

春季大会個人研究発表・ワークショップの募集

テーマ及び要旨(200字)を下記の要領で郵送、fax、e-mail等でお知らせください。

締切：3月25日